

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 2 月 16 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530155

研究課題名(和文)ペロニズム(1945-55)における労働者の支持に関する新しい解釈を目指して

研究課題名(英文)Toward a new interpretation of labor support to Peronism(1945-55)

研究代表者

松下 洋(Matsushita, Hiroshi)

京都女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：60065464

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：ペロニズムへの労働者への支持をめぐる、1943-46年の期間においては旧労働運動指導者の合理的選択だったとするムルミスとポルタンティエロの説に対して、本研究は45年10月17日事件の再検討を通して、彼らのペロン支持にも感情的支持は否定しがたいこと、エビータへの熱い支持が45年10月に始まっていたことを明らかにした。また、46年以降における新旧の労働者のエビータに対する熱狂的な支持には感情的・心理的要因だけでなく、エビータが女性参政権の制定やエバ・ペロン財団に依拠した救貧活動などの彼女による具体的な成果が労働者大衆を魅了したとの事実も無視できないことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study intends to present a new interpretation on labor support to Peronism between 1945 and 55, challenging the hypothesis of Murmis and Portantiero who emphasized the rational choice of the veteran labor leaders in their support to Peronism during its incipient period (1943 to 46). Instead, it stresses psychological elements in their support to Peronism, through the analysis of their activities on October 17, 1945 and their contacts with Evita which really began on that day. It also makes it clear that although old workers as well as new ones sometimes showed their unconditional and passionate royalty to her during Peron's administration between 1946 and 1955 (Evita died in 1952), it is worth pointing out that their admiration of her was based upon their rational appreciation of her real contributions to the legalization of female suffrage and her energetic activities as the top of Eva Peron Foundation.

研究分野：政治学

キーワード：ペロニズム ポピュリズム 女性参政権 心理的 プロスペクト理論 エビータ ペロン エバ・ペロン財団

1. 研究開始当初の背景

アルゼンチンのペロニズムはラテンアメリカのポピュリズムの一例であるが、労働者の支持が運動を支える基盤となっている点に特異性がある。このため、ペロニズムが政権を初めて政権を掌握した 1946 年の時点から今日に至るまで、何故労働者がペロンを支持し、政治運動としてのペロニズムが生まれたのかについて様々な見解が提出されてきた。とくに、研究代表者がペロニズムの研究を開始した 1970 年代はじめには二つの説が鎬を削り、激しい論争が起こっていた。論争のきっかけは、ミゲル・ムルミスとファン・カルロス・ポルトンティエロという若い二人の社会学者が、それまで定説となっていたジノ・ジェルマーニの説を 1971 年に公刊した書物の中で手厳しく批判したことにあった。ジェルマーニによって提出され定説となっていたのは、ペロンを支持した多くの労働者が、農村出身で都会生活になじめない新労働者であり、心理的に不安定であったことから、上からの操作に屈しやすい「操作され易い」大衆となってペロニズムが誕生したと見る見方である。つまり、労働者の中心は新労働者であり、移動にもなまって引き起こされた心理的動揺が彼らをペロン支持に向かわせたというのである。これに対して、ムルミスとポルトンティエロは、ペロニズムの形成期（1943-46）にあっては、旧来の労働運動指導者もペロンを支持し、彼らがペロンと労働者とを結びつける上で重要な役割をはたしていたことを明らかにした。そして、ジェルマーニの移動仮説を否定して、新・旧の労働者を合わせた労働者全体が 1930 年代の保守支配体制の下で進められた労働者への所得再分配なき輸入代替工業化への不満を募らせていた。そうした中で、彼らは労働者の保護を目指すペロンに接し、最も適切な選択として彼を支持したというのである。

研究代表者は、この論争に興味を持ち、旧労働者が 43-46 年の時期に、ペロニズムの形成に重要な役割を演じたことが明らか以上、ムルミスとポルトンティエロの説に分があると判断し、1930 年代における労働運動指導者の政治的イデオロギーの変化やナショナリズムの高揚に焦点を当てた博士論文を 1980 年に提出した。同論文が 83 年に本として出版されると高く評価され、教材として活用する大学も少なくなかった。2014 年にはブエノスアイレスのある研究所が復刻版を出版してくれた。

こうした経緯から研究代表者は、ムルミスとポルトンティエロ解釈の支持者とみられてきた。しかし、2000 年頃から彼ら二人の解釈には心理的要素が無視されているが、それは妥当であろうかという疑問を持つに至った。ポピュリズムには特にそれが大衆の心をつかんでいる場合には、情緒、情熱といった感情的要素がリーダーとの間に存在していたのではないかと、ペロニズムの形成期に旧労働

運動指導者にもそのことは当てはまるのではないかと。こんな疑問が生じたきっかけは、90 年代にアルゼンチンのメネム政権やペルーのフジモリ政権などのネオポピュリズムが出現したことだった。これらのネオポピュリスト政権は、ペロンのようないわゆる古典的ポピュリズムとは異なり、緊縮政策の遂行など労働者にとって不利益となる政策を推進した。それにもかかわらず、大衆の支持を得たとすれば、リーダーに対する尊敬などの心理的要因があったのではないかと。そして、それはポピュリズムにほぼ共通して見られるとすれば、ムルミスとポルトンティエロの解釈とは異なり、そうした側面がペロニズムの形成期における旧労働者の行動にもあったのではないかと。そんなことに思いを巡らしていた時に、たまたま出くわしたのが、ネオポピュリズムの研究者として国際的にも知られたウェイランドによる『脆弱な民主主義下の市場改革政治：アルゼンチン、ブラジル、ペルーとベネズエラ』（英語、2003）と題した本だった。同書においてウェイランドは認知心理学から生まれたプロスペクト理論を援用して、労働者大衆が新自由主義政策を支持する理由を説明していた。プロスペクト理論によると、人は利得局面にあるときは危険を回避する傾向にあるが、反対に損失局面にある時は損失を早く取り戻そうとして、危険を受容する行動に出がちであるとされる。この理論をネオポピュリズムに当てはめると、80 年代のラテンアメリカでは債務危機やインフレに苦しみ、大衆は損失局面にあった。そのために自分たちにとって危険の多い新自由政策を進めるネオポピュリストを支持したというのがウェイランドの解釈だった。

この解釈に興味を覚えた研究代表者はそれを利用して、1945 年 10 月 17 日事件の際の CGT（労働総同盟）が危険の多いゼネストに踏み切った理由をうまく説明できると考えた。ゼネストに踏み切ったのは、10 月 9 日にペロンが公職を解かれたことにより、労働者は突然損失局面に立たされ、彼らの総元締めであった CGT（労働総同盟）がとった行動は、プロスペクト理論でいう損失局面における危険受容型行動の典型例に他ならないと解し得るからだった。こうした解釈を二つの論文（Hiroshi Matsushita, “El 17 de Octubre a la luz de la teoría prospectiva,” en Santiago Senén González y Gabriel D. Lerman, comps., El 17 de Octubre de 1945: Antes, durante y después, Editorial Lumiere, Buenos Aires. 2005 と 松下洋「ペロニズム形成期（1943-46）における労働者の支持に関する新しい解釈を目指して—プロスペクト理論による 1945 年 10 月 17 日事件の分析から—」『現代社会研究科論集』第 4 号（京都女子大学大学院、2010 年）において発表した）が、この事件だけでは旧労働運動指導者の心理的支持を説明するのは不十分であると悟り、45 年 10 月 17 日から 46 年 2 月

の大統領選での勝利に至る間での旧労働運動指導者の感情的なペロニズム支援がどうであったか、またペロン政権の発足（46年6月）後は、ペロニズム労働者の感情的側面はエビータへの熱烈な支持として表明されたので、エビータと労働運動との関係を調べたいと思った。以上が本研究を開始した背景である。

2. 研究の目的

形成期のペロニズムにおいて労働者が何故ペロンを支持したかに関しては、新しい労働者が都市に移動して間もなく心理的に不安定であったためという説と旧来の労働運動指導者を含めた労働者全体が保守支配のもとで不満を強めていた時に、親労働政策を進めるペロンを支持したのであって、彼らの支持は合理的で、心理的要因は重視されるべきでないとする説が有力である。本研究は、旧来の労働運動指導者のペロン支持にも心理的要因が介在していたことを明らかにすることにより、上記二説とは異なる第三の説を打ち立てることを目指した。

3. 研究の方法

本研究における調査方法の基本は、現地でのフィールド・ワークだった。旧労働運動指導者の回顧録、ディテラ大学が所有している労働運動指導者のオーラル・ヒストリー、当時の一般紙、雑誌などを使って、実証的な研究を目指した。

4. 研究成果

現地でのフィールド・ワークは時間的には限られていたが、研究開始時に予想したと違うことを多く発見したのは、重要な成果であった。

第一に、10月17日事件についての評価である。上述したように、この事件の時のCGTの行動だけでは、旧労働者の心理的なペロニズム支持の説明として弱いことを現地の研究者からも指摘された。そこで、研究代表者は、10月17日の勝利により労働者が精神的な高揚感を抱いていたことは間違いなく、それが45年11月に旧来の労働運動指導者が中心となって結成された労働党の主張の中にも表れているのではないかと仮定して調査したが、期待したような事実は発見できなかった。ただし、45年10月17日の夕刊紙『クリティカ』に、デモが始まる前の段階で、ペロンを支持するグループを「感情と確信をもったグループ」と評している記事にでくわした。このことは労働者のペロン支持を心理面から探った場合にプロスペクト理論を使って抽出される「危険受容行動」の他に、労働者のペロニズムに対する感情的支持があったことが示していたと見ることができる。このことを念頭に入れて、心理的側面から10月17日事件を見る場合にはプロスペクト理論の活用の他にデモに参加した人々の発言

などを参照して、本報告の論文では最初の部分で10月17日事件を再論することにした。

エビータについても重要な事実のいくつかを知ることができた。ひとつは、10月17日事件に関連することである。以前の論文では多くの研究者の意見に従って、当日彼女が果たした役割はほとんどなかったとしていたが、この事件を通して彼女と労働運動指導者との関係が深まったことが分かった。その意味で、労働者のエビータに対する熱い支持、感情的な支持が始まったのは45年10月17日事件であることを確認できた。

勿論、エビータに対する労働者の熱い支持は、単なる心理的なものではなく、彼女の具体的な行動、特に女性参政権の成立に尽力したことやエバ・ペロン財団を通して実施した慈善活動の数々が労働者の共感と呼んだからだったことも今回確認できた。つまり、ともすれば労働者のエビータに対する熱烈な支持は感情なものと考えられがちだが、利益の問題とも無縁ではなかったのである。なお、エビータと労働運動との関係を調べているなかで、今日のアルゼンチンではペロニスタ左翼グループ（一部の労働者を含む）のアイドルがペロンに代わってエビータとなっていることを知り、こうした現象の背景には70年代のゲリラ思想が21世紀に復権したという背景があることを「21世紀アルゼンチン外交に見るゲリラ思想の影」において明らかにした。また、同論文の続編として、「21世紀アルゼンチン外交に見るゲリラ思想の影：ゲリラ思想を復権させた母親たち」を公刊した。二論文は本研究と間接的につながるものだが、今日におけるペロニズムの一側面を照射していると思っている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2件)

松下 洋 「21世紀アルゼンチン外交に見るゲリラ思想の影：ゲリラ思想を復権させた母親たち」、『現代社会研究』Vol.18、2015年11月

松下 洋 「21世紀アルゼンチン・ペロニスタ外交に見る1970年代ゲリラ思想の影」、『研究論集』第12集、査読無、2015年5月、pp.167-188

〔学会発表〕(計 2件)

松下 洋 「労働者ペロニズム支持における心理的側面をめぐって」(Los aspectos psicológicos en la adhesión obrera hacia el peronismo) ラテンアメリカ国際学術連盟大会、2015年8月27日、釜山(韓国)

松下 洋 「復刻版の出版にちなんで」(Con motivo de la reedición de mi libro) ブエノスアイレス大学、2014年6月7日、ブエノスアイレス(アルゼンチン)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松下 洋 (MATSUSHITA, Hiroshi)
京都女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：60065464

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：